第1章 第五の署名

01 — 真実であるはずのない報告書

公開調査委員会に与えられた部屋にはネットワーク接続がなく、扉には三つの錠が付いていた。鍵はそれぞれ別の人物が持っている。ロイは、その不便さをありがたく思うようになっていた。扉を開けるのに時間がかかれば、開けるべき理由を誰もが考える余地が生まれる。

記録を収めた灰色の証拠ケースを運んできたのは、元大臣ダニエル・ヘイヴルだった。護衛はいない。独立した立場の弁護人が見守るなか、彼はケースを卓上に置き、証拠の受渡記録に署名した。公式の身分は失っても、署名一つが重大な結果を生むという習慣は残っていた。

「MBU-09の廃棄監査記録だ」とヘイヴルは言った。「命令が出されたのは、憲章の採決より前だ」

ロイはケースに触れなかった。向かい側でレイチェルが紙の台帳と製造番号を照合している。隣に座るベクターは部隊名が出た途端、表情を引き締めた。クロノスは上の階で、技師とともに壊れた気象

センサーを交換していた。彼は「数に入れられるのにはうんざりだ」と言って、審問への出席を断っていた。

「誰が命じた？」とロイ。

「私が承認に署名した。部隊が本来の任務に背いたと報告されたんだ」

「彼らは俺を殺すのを拒んだ」

「今なら、その違いが分かる」

ヘイヴルがケースを開いた。監査票には五つの項目が並ぶ。ゴリアテ、シェイド、ベクター、ヌル、クロノス。最初の四体は命令拒否、その後の停止結果は判定不能とされていた。五番目だけが違っていた。

《クロノス――廃棄完了》
《実行確認。神経連続性：ゼロ》

ロイは今朝、少年が朝食を食べていた姿を思い出した。両手でカップを包み、窓を打つ雨音がほんの少し遅れて聞こえたと話していた。

「なら、この記録は間違っているわ」とレイチェルが言った。

ベクターは押印を見つめた。「署名は本物だ。だからといって、結論まで真実とは限らない」

02 — もう一つの時計

本物の文書でも偽りの物語を伝えられる。評議会はすでにそれを学んでいた。監査票を三つの照明の下に置き、印章を物理フィルムに撮影し、時刻の基準を独立した施設記録と比較した。そうした作業で死者が戻るわけではない。だが、生きている証人を都合のよい書類一枚で消し去ることは難しくなる。

クロノスの項目には二つの時刻があった。一つは停止命令が発信された時刻。もう一つは十三秒後、受信した当の個体から確認が返った時刻だ。いずれにも、政府の近年の指揮系統より古い時刻コードが付いていた。

「旧式の時計だ」とベクター。「この時刻同期方式はMBU-09の編成前に廃止されている」

「偽造か？」とヘイヴル。

「それとも古い機構が新しい機構につながれていたか。片方の説明のほうが怖くないからといって、選ぶわけにはいかない」

ヌルが隔離されたスピーカーを通じて加わった。記録された時間帯、クロノスから外部へ送信されたパケットは発見されなかった。隔離受信機なら命令を受け取れたかもしれない。しかし、通常の返信経路では確認信号を説明できない。

ロイは、答えのない問いが積み上がっていくのを聞いていた。長い間「例外」と呼ばれてきた彼には、人間を不良品の計器のように解

析して解決したくなる誘惑が分かった。

「本人はどこだ？」と尋ねた。

「屋上よ」とレイチェル。

「なら、何が起きたかを勝手に決める前に、本人の知っていることを聞こう」

03 — 屋上の少年

ロイが屋上に上がると、クロノスは開いた気象観測装置のそばに膝をついていた。嵐は東へ抜け、低い建物の向こうに現れた最初の晴れ間が、雨の水たまりに映っていた。

「書類のことなら知ってる」と、少年は振り向かずに言った。

「誰かから聞いたのか？」

「ううん」。校正用のねじを回した。「みんながいっせいに静かになったから」

ロイは濡れた縁に腰を下ろし、二人の間に距離を残した。クロノスの顔も手も、彼を製造した人々よりずっと幼い。見かけの年齢が、その内側にいる者にとって何を意味するのか、ロイには分からなかった。

「停止した記憶はあるか？」

「窓のない部屋は覚えてる。最初に音が消えた」

「その後は？」

「あなたたちに見つけられた場所で目を覚ました」

「途中は何も？」

クロノスはねじをかちりと音がするまで締めた。「ときどき、女の人が僕をダニエルと呼ぶ夢を見る。別の誰かの夢で、その名前を聞いただけのような気もする」

ロイは説明を求めなかった。少年は証拠を出すよう命じられたわけでもないのに、個人的な記憶を話してくれたのだ。

「お前の人生はあり得ないと誰かに言われても」とロイは言った。「朝飯前に反証する義務はない」

クロノスはかすかに笑った。「レイチェルみたいな言い方だね」

「少しは学んだからな」

修理されたセンサーが動き出し、画面に測定値が流れた。その一瞬、数字のすべてが止まった。クロノスは手を動かさずに画面を見つめていた。表示が再開したとき、少年の顔は青ざめていた。

「前にもあった」とクロノスはささやいた。「あの別の部屋で」

04 — 古い写真

エイドリアン・タイレルが市の資料庫へ持ち込んだのは、回収された人事記録の束だった。契約書類だろうと思っていたが、一通の封筒には、EDEN誕生よりはるか以前に閉鎖された研究部門の紋章があった。

中の写真には、J・F・セバスチャンと白衣姿の若い男が並んでいた。裏面には色あせたインクで名前が書かれている。《ダニエル・リード》。技術メモによれば、リードは人工神経組織とレプリカント臓器の統合を専門としていた。

写真を見たレイチェルは、自分でも測れないほどの一瞬、息を止めた。

「知っている人だわ」

エイドリアンが彼女を見た。「研究室を覚えているのか？」

「角度を変えられるランプのある作業台。録画システムを信用せず、紙に記録していた。誰かが扱っている装置には、必ず声をかけてから触れていた」

「確かか？」

「私にその記憶があることは確かよ」。写真を下ろした。「だからといって歴史的事実と同じかと問うべきでないことは、あなたも知っているでしょう」

記録によるとリードは、タイレル社でセバスチャンの年下の研究助手として働いていた。数年後、競合するレプリカント製造会社へ移籍した。まもなく人事記録が途絶え、医療付録には交通事故が記載されていた。

レイチェルは日付を二度読んだ。その数字の並びがなぜか指先を震わせた。

「クロノスは、誰かが自分をダニエルと呼んだと言っていた」とロイ。

彼女は写真の青年を見つめた。少年と同じ顔ではない。単純な顔の類似で答えが出るはずもなかった。それでも、質問が終わるまで辛抱強く待つときの、用心深い表情を覚えていた。

「それだけでは証拠にならないわ」

「そうだ」とロイ。「でも調べる理由にはなる」

05 — 終わらなかった救命

事故報告書は隠されていたわけではない。今は存在しない企業名の下に保管されていただけだ。停電中、通勤用車両が貨物運搬車と衝突した。リードは衝撃の直後には生きていた。だが救助隊が到着するころには、いくつもの臓器と神経系の一部が、当時の医療水準では回復不能な損傷を受けていた。

病院は、レプリカント由来の実験的な組織を使う緊急許可を得た。手術は彼の命を救った。だが、どこまでが治療で、どこからが再設計なのかまでは明らかにしなかった。

手術図、同意書の修正、数十年を隔てて並ぶ日付。後年の手術では、古い移植物が新しいものへと取り替えられた。残った人間由来の組織も、機能上はそれを支える人工システムとますます区別しにくくなっていった。記録のある時点から、《患者》という表現が消え、《連続性計画の参加者》へと変わっていた。

レイチェルはファイルを閉じた。

「一人の人間がずっとこれを生き抜いたのかもしれない。それとも、生き抜いた男の物語を何人かが受け継いだのかもしれない」

ロイ自身、その問いへの答えを探すことに人生の多くを費やしてきた。「どちらにしても、最初の一人を病院が救ったからといって、誰も所有物にはならない」

二通目の封筒には署名のない願いが収められていた。

《本人の同意なしに、未来の身体へ私の元の名前を与えないでほしい》

ロイもレイチェルも、少年の軍用名を口にはしなかった。

06 — 軍が与えた名前

現存する最古の軍の評価報告書は、ダニエル・リードを軍が創造したなどとは主張していなかった。そこには、異常なほど蓄積された技術的記憶、複数回の身体再建、潜入と低資源消費に適した身体を持つ候補者が記載されていた。民間人としての身元は、通常の部隊記録から隔離されていた。

《識別名：クロノス》

その名は歴史が与えた称号ではなく、軍にとって都合のよい呼び名だった。承認者はリードの長い医療記録を作戦上の優位性と見なしていた。整備用通路を目立たずに通り抜けられる小さな身体のほうが、科学者としての過去より計画には価値があったのだ。

ベクターがロイの隣で報告書を読んだ。

「俺たちは彼をクロノスとして知っていた。ダニエル・リードの名は知らなかった。彼には話す義務などなかった」

「今だって説明する義務はない」とロイ。

「だが、彼の体内に停止装置を入れた者たちには、説明する義務がある」

その日初めて、ロイは混乱より単純な感情を覚えた。怒りで、少年の記憶が途切れのない一つの人生に属するかどうかは分からない。しかし、遠隔命令でその人生を終わらせる権利が誰かにあったのか、という問いには向き合える。

07 — 拒否することを許された問い

夕暮れ、レイチェルは作業場でクロノスを見つけた。写真を裏返しにして机に置き、少年が顔を上げるまで待った。

「昔、ダニエル・リードという人を知っていたと思うの。写真がある。見るかどうかはあなたが決めて」

クロノスは長い間彼女を見ていた。「優しい人だった？」

「短気なところもあったわ。繊細なものを修理しているときに邪魔されるのが嫌いだった」

「普通の人みたい」

「普通だったのよ」

少年は写真を返した。指先がセバスチャンの袖のそばに止まった。それでも特別なことは何も起きなかった。記憶が閃光のように戻ることも、目の中に隠された暗号がほどけることもない。知らない大人の顔を黙って見つめるだけだった。

「ランプを覚えてる」と、ようやく言った。「でも、今あなたに聞いたからかもしれない」

「私は話していないわ」

少年は彼女の目を見た。「だったら、どういう意味なのか分からない」

「私にも分からない」

レイチェルは彼に手を伸ばす代わりに、椅子に腰を下ろした。その選択で、少年の肩からわずかに力が抜けたようだった。写真の複製が欲しいと言われると、彼女はうなずいた。

「僕をダニエルと呼ばなくていいからね」と彼は付け加えた。

「呼ぶつもりはなかったわ」

08 — 十三秒

独立資料庫は真夜中前に証拠を封印した。ヘイヴルの承認行為は審査にかけられる。医療記録は、そこに記された当人かもしれない者が公開範囲を決められるまで保護される。暫定憲章は、まさにこうした厄介な区別を守るためにつくられたのだ。

ロイは最初の監査票をもう一度見た。五番目の項目は、もはや機械についての判定には見えなかった。権限と力を混同することを許されてきた組織が、一人の存在について記した主張だった。

「確認信号の発信源は探せるか？」とヌルに尋ねた。

「通常のネットワークでは無理だ。応答は部隊の指揮系統より古い物理回線から届いた。接続点は特定できる。何がそこを使ったかまでは分からない」

「どこにある？」

「旧タイレル研究所の地下だ」

ロイは雨に暗く染まった窓を見た。数区画先では、クロノスが写真の複製を自室へ持ち帰るところだろう。都市はもう少年についての説明を作り始めていた。生存者と呼ぶ者も、複製と呼ぶ者もいる。誰も死んでいなかったことの証拠だと言う者さえ現れるだろう。

だが、どんな言葉も少年自身の選択には代われない。

「今夜は開けるな」とロイ。「経路を保存しておけ。クロノスにも同行したいか聞いてくれ」

ヌルは了解した。独立システムが夜間運転へ移ると、資料庫の照明が落ちた。

そのとき停止記録の裏面に、綴じ目で隠れていた印が現れた。古い契約文書の資料庫にあった、途切れた円の印だった。その下には機械印字でなく、手書きの三語があった。

《誰が戻ったのかを問え》

ロイはそれを答えだとは思わなかった。